

会報

大橋康二先生の特別講座を開催！

本年度は県立九州陶磁文化館名譽顧問でもある大橋康二先生による特別講座がスタートし、年間を通しての実のある研修が実現した。

第1回目は7月20日「やきものの見方」を九州陶磁文化館研修室にて受講した。初期伊万里から現代の陶片を実際に見ながら、一番古いものはどれか？いっ頃作られたか？など、成形、装飾法、窯詰め法（焼成法）などの見極め方を解りやすい解説を聞き学習した。

第2回目は8月24日、「有田磁器激動の400年」の表題で、有田磁器の誕生から現代までの400年を振り返り研修した。有田磁器生産が飛躍的に発展した発端が、中国の明王朝から清王朝へ代わる内乱により輸出が激減、国内需要が肥前に集中したことで磁器市場を独占したこと、中国からの技術導入や色絵焼成の成功、海外輸出などを学習した。



第1回「やきものの見方」は実際に陶片を見ながら見極め方の研修を行った。

3月8日には第4回目となる講座「鍋島と禁裏御用」の開催を生涯学習センター会議室にて予定しております、充実した一年間となりました。

平成29年度活動報告

- 4月 例会 (生涯学習センター)
- 5月 例会 (生涯学習センター)
- 6月 例会 (生涯学習センター)
- 7月 例会・第1回講座 (同上会議室)
- 8月 例会・第2回講座 (同上会議室)
- 9月 例会・第3回講座 (同上会議室)
- 10月 例会 (生涯学習センター)
- 11月 企画展鑑賞 (九州陶磁文化館)
- 12月 例会 (生涯学習センター)
- 1月 例会&食事会
- 2月 例会 (生涯学習センター)
- 3月 例会 (生涯学習センター) 予定
- 第4回講座 (同上会議室) 予定



新年食事会 控えめな坂井新会長と全員が集合！ &例会 2018.1.18 まるいレストランにて

「熊本のやきもの」鑑賞！

11月7日、熊本地震の復興を祈念する特別企画展を家田副館長の解説を聞きながら鑑賞した。企画展では有田の焼物とは違った温かみのある素朴な土物のやきものには深い味わいがあり、有田を中心とする肥前窯業圏との関わりなどより詳しく知ることができた研修になった。



新年食事会&例会

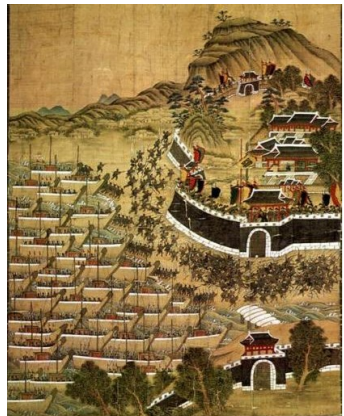
平成三十年一月度の例会は食事会を兼ねて開催、今回は全員が待ち望んだ栗山氏の「有田言葉」の自費出版と事務局長のアクシデントも重なり？会話が長時間におよび弾んだ。通常の例会は、連絡事項の確認と近況報告を中心に行っているが、有田異人館の運営に多くが関わっているため、勤務調整や勤務状況の確認なども行い、異人館管理運営の一翼を担っている。

釜山・倭城見学

中村貞光

釜山旅行では、文禄・慶長の役のおり日本軍によって陥落し、今も倭城として残る釜山浦倭城と釜山支城を見学した。倭城に残る石垣は日本の城造りそのもので、日本軍による築城だと良く解る。ちなみに倭城は、蔚山2カ所、釜山9カ所、慶尚南道14カ所、全羅南道1カ所の全26カ所が確認されている。

文禄の役(1592年)が始まる前年、豊臣秀吉の命により、波戸岬の丘陵に名護屋城が築城、130以上の諸大名の陣屋が構築され、朝鮮出兵の拠点となった。第一陣は小西行長と宗義智(出征軍1万8千7百人、軍船7百艘)で釜山へ上陸、2カ所の砦と釜山鎮城を同時に攻撃、一昼夜で攻略に成功した。その後毛利輝元らによって釜山浦倭城を築き前線基地とした。(釜山鎮城は15世紀、倭寇から釜山浦を防御するために作られた城)釜山は兵站基地としての重要な拠点となる。記録によると第九軍まで出陣し、15万6千8百人が渡海している。



文禄の役「釜山鎮城節図」釜山鎮城攻略の様子で、左に密集しているのは上陸した日本軍船。



「通度寺(トンドサ)」は、韓国三大名刹寺院で646年に創建された。文禄・慶長の役でそのほとんどが焼失し、現在の建物は、1601年と1641年に再建された。

釜山の北にある老圃洞からバスで約1時間の場所に通度寺という名刹があるが、敷地内には樹齢何百年といわれる松の木が生い茂る遊歩道や溪流など自然溢れる寺院も、文禄・慶長の役の際に殆どが焼失している、歴史の繋がりをさらに感じた。機張の博物館では、14〜16世紀頃の焼き物を鑑賞。朝鮮陶工たちが日本へ来た当時の韓国の窯場の状況を知ることができ、有田へ繋がっていくことに感動を覚えた。

私の近況

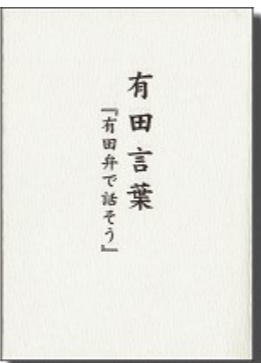
坂井勝也

現在、私は有田老人クラブにも所属していますが、昨年から有田町介護保険課より、有田老人クラブに有田町介護予防サポーター養成講座(講座4回、実技8回)を受けるよう要請があり受講しました。昨年10月より本年1月19日までの全講座を修了し、10名が2月より実地



訓練を兼ねて活動することになっていきます。将来、要介護1〜2については、国、市町村でお世話することが困難になることが予想され、有田町でも熊本県の専門機関にお願いし昨年より養成講座を実施しています。簡単に言えば、元気な老人クラブの方々の養成し、要介護1〜2の方のお世話をすることになります。今回は10名の卒業でしたが、現有田町老人クラブの池田会長はじめ幹部の方々も熱心に受講されていますので、新年度から会長の鶴の一声で各単老も力を入れ研修生が増えるものと思われれます。実技の方は、別名「元氣が出る学校」という名前で、介護保険課を窓口 to 毎回7人程度の方が参加されておられます。75歳以上になると意識して体力を増進したり気持ちを前向きに持っていかないと、寝たきりになる危険性が大であると痛切に感じました。今年、唐船城築城800年を迎えます。この記念事業の取り組みに、有田史談会より委員の一人として参加しています。微力ですが成功に向けて頑張りたいと思っています。

「有田言葉」が発刊！



待望の「有田言葉」が発刊された。史談会のメンバーである栗山慎悟氏によるもので、郷土の方言に興味を抱き、40年もの歳月をかけて、記録にとどめてきた有田の数を一冊の本にまとめられ、このほど自費出版されることになった。有田弁(単語)と会話の実例で構成されているので解り易い。方言には幼い頃の郷愁を呼び起こす不思議な魅力がある。方言は地域や地方で生まれた独特の単語で、幼い頃は方言で話すことが自然で当たり前だった。特に有田弁は強い、怖い、汚いと言われる。兄弟で話していると喧嘩してるようだと言われたものだ。最近では方言で話すことは少なくなつたものの、やはり方言は温かみがあつて良い。

有田弁

アヒルは、アヒル
アヒルは、アヒル
アヒルは、アヒル

子年の大風

栗山慎悟

日本史上最も有名な台風は、鎌倉時代に日本を襲来して蒙古軍を壊滅させた、神風と呼ばれる台風であるが、日本史上最大級の被害をもたらした台風は、文政十一年八月九日（西暦一八二八年九月十七日）の台風ではないだろうか。

シーボルト台風

文政十一年八月九日（西暦一八二八年九月十七日）の台風は、日の暮れかかるころから雨は降りだし、九時頃から風雨となり、一時頃にはさまざまな暴風雨となり、家を倒し大樹の枝を折り、また根から吹き倒し、人を傷付け、浜は千二百丈の波に襲われるなど未曾有の暴風雨であった。十日の五時頃には風雨はしだいに弱まり、朝には風もおさまり小春日和となった。この台風は、長崎市内・長崎県内に甚大な被害を与えたが、もう一つ日本史に残る大事件を起こしている。

ドイツ生まれで出島オランダ商館医のシーボルトは、帰国のため準備していたコルネリウス・ハウトマン号が、台風のため稲佐沖に難破して、難破船から伊能忠敬作成の日本地図や、将軍家の葵の紋入りの羽織などの禁制品が見つかり、シーボルトは「日本御構え（国外追放）」、「再渡来の禁止」の罰を受ける。

また、シーボルトに禁制品を渡した日本人も厳しい罰を受け、その数五十数人に及んだ。ゆえに文政十一年八月九日の台風がシーボルト台風と呼ばれる所以であり、シーボルト事件として日本史に記されている。

台風の勢力

九州西海上を北上して長崎西方に上陸した台風は、シーボルトの船を座礁させ、長崎県・佐賀県をはじめ大分県・福岡県・山口県に甚大な被害を与え日本海へ抜けている。被害状況は、死者一人、全壊家屋四万九千戸、半壊家屋二万四千戸、流出家屋二万八千戸と推測されている。また流出田畑、堤防の決壊、山崩れ、破船など多大な被害を与えている。この台風は、九日の夜九時頃から荒れ始め、翌十日の朝五時に暴風雨は過ぎていくことから、強くて速度の速い台風であったと思われる。

この台風をシーボルトが観測している。九日の朝は、気圧一〇〇七mm、気温二四、四度、湿度八九度、東の風、晴となっているが、台風が上陸してシーボルトが観測している家が倒壊する直前の観測では、気圧九五二hpa、気温二五度、湿度九七度、南東の風と記録されている。このことから中心気圧九〇〇hpa、最大風速五〇m、最大降水量三〇〇ミリと推測されている。

子年の大風

文政十一年八月九日の台風は、文政十一年が、戊子（つちのえね）にあたることから、子年の大風と呼ばれる。

長崎西方に上陸した台風は、勢力の衰えることなく佐賀県を直撃する。佐賀藩は、この被害状況を幕府へ報告している。その被害報告を『鍋島直正公伝（第一編）』から抜粋する。

- 水田田島 七千七十一町五段余
 - 汐下田島 八千三百七町九段余
 - 砂下田島 三千七百六十五町四段余
 - 潰家 三万五三六四軒
 - 半潰家 二万一〇五七軒
 - 焼失家 一六四七軒
 - 怪我人 一万一三七三人
 - 溺死 二二六六人
 - 横死 七九〇一人
 - 焼死 一一五人（男八〇人、女二八人、按比数不合暫従原書）
- 他に、川や汐留の堤防の決壊、山崩れ、道路や橋の損壊、土蔵の倒壊、家屋の流出、倒木、破船、流出船、牛馬の被害など多大の被害が報告されている。

文政の大火

有田皿山は、深夜十二時頃から風が吹き荒れ、豪雨を伴う大台風となり、その中、岩谷川内の窯焼山口森吉方の素焼窯の火を吹き飛ばし大火となった。火は台風の中猛烈な勢いで燃え猛り有田皿山を舐め尽した。

有田千軒と言われた焼き物の町は、岩谷川内に四十戸、白川に百戸、年木谷に十戸と頑丈な土蔵数軒を残し灰燼と帰した。窯の中に逃げ込んで煙により窒息する者、逃げ遅れて焼死する者、河川の氾濫によって溺死する者五十四人に及んだといわれる。

前記の焼失家一六四七軒の大部分は有田皿山のものとして推測される。

『鍋島直正公伝（第一編）』には、有田皿山の惨状を次のように記している。

『古来未曾有の大災変にて、その損害も実に夥しかりしが、就中（なかんずく）最も酸鼻を極めたるは磁器産出地の有田にて、狭隘（きょうあい）の山間とて、風を避けつつ家々みな土蔵を閉じていたりしかば、折しも起こりし火災の災焰に裏（つ）まれて、焚死（ふんじ）したるもの無数なりき。』（原文のまま）

この火災により記録類も灰燼に帰し、大火以前の歴史を知ることが困難となった。有田では文政の大火として有田町史に記される。

《参考資料》

- 『肥前陶磁史考』中島浩氣著 青潮社
- 『日本歴史災害時典』北原系子・松浦律子・木村玲欧編 吉川弘文館
- 『丸山遊女と唐紅毛人（後編）』古賀二郎著 長崎学会編 長崎文献社
- 『新・シーボルト研究』八坂書房

酸化焼成と還元焼成

井手邦男

私がガイド案内のおり、お客様に『この泉山の石で焼き物をただ焼くだけでは白くなりません』と説明すると、お客様は『なぜ白くならないのか？』と聞いてこられます。今まで接してきたお客様の中の9割くらいの方が焼き物をただ焼くだけではなぜ白くならないのか？を知りませんでした。

焼き物を焼くには酸化焼成、還元焼成という2つの焼き方があります。白い磁器を焼くときには還元焼成で焼かないと白くなりません。このことを皆さんがご存じないので

昭和年代の方は酸化焼成、還元焼成に関連した内容として、小学校の5〜6年生の時に理科の実験で勉強をされたと思います。その内容としてはロウソクに火をつけるとロウソクの炎には内炎と外炎ができます。竹ひごを曲げるために内炎に通すと煤けませんが、外炎に竹ひごを通すと熱くなり煤けることなく竹ひごが曲がりません。これが酸化還元炎の学習の第一歩です。

酸化焼成で焼くと『焼き物は白くなりません』が、内炎で焼く方法で窯の中の状態を変えて（酸化焼成から還元焼成に変えて）焼くと白くなります。窯の大きさや煙突の高さによっても違いはありますが、温度が850〜860度を超えたくらいか

ら還元炎（攻め）をかけ、温度が約1280度から上炎になり炎を止めまらう。明治以前は温度が1320度くらいで焼かれていたようだと聞いていました。

明治期になりドイツの科学者であるゴットフリート・ワグネルが長崎に來日し、明治3年に有田に來て焼き物の技術を教えたと言われている。その当時は、温度が1300度で焼かれている焼き物は、釉薬の中に石灰石を混ぜると温度が低くても焼けるということを教えてくださいました。それによって若干低下温度でも焼けるようになりました。現在も石灰釉という名前で生産をされて焼き物に使っています。

二宮都水の考えた帯留

馬場正明

江戸時代も中期を過ぎると着物のファッションも変わり、帯は広幅なものも出て来て、帯の上から帯を固定するため帯締紐が使われ始めた。この帯締紐を飾るため使われ始めたのが帯留です。

時代が代わって明治になると廃刀令が公布され、刀の鑊や目貫の細工をしていた職人さんが職を失い、帯留を作るようになって来たことで、帯留が広まってきました。ただ、刀の細工職人さんが作った物のため、大方が金具と鼈甲（べっこう）、サンゴ、硝子等と組み合わせたものでした。

昭和3年、大阪の朝山亮太郎は、金具とサンゴなどを組み合わせた帯留では、金具とサンゴの取り付けが外れ易くサンゴを損なうということから「サンゴの裏面に梁柱を残して溝を彫りこの溝に帯締紐を通す」という一体型の帯留を考案をし（実公昭212894号）、実用新案として認められました。

丁度その頃、二宮都水は有田に來て、香蘭社、深川製磁、柿右衛門合資会社に勤めた後、自営独立して彫刻のかたわら帯留の制作に着手しました。昭和6年二宮都水が作った帯留は熊本大演習で佐賀にお成りになられた秩父宮に、また翌年には東伏見宮大妃にそれぞれ献上され話題になり社交界に流行しました。香蘭社でも象牙彫刻の帯留を見本としてその試作をしました。

この様な状況の中、二宮都水は先の朝山の考案が、ただ紐通し穴をあけただけでは帯留が紐より抜けるという欠点があることが判り、改良を加えた考案を申請しました。（実公昭81376）

その内容は「帯留の裏面の紐通穴を弧状にし、内底に突起部を設け、この突起部の左右に紐挾持部をわたり、全裏面を側面弧状と成形するとともに内外底に釉薬を施す陶磁器製帯止具の構造」というものです。

突起部と挾持部とに依り、紐にはそれぞれ接触点で滑り抵抗が生じ紐が抜けにくく、裏面を弧状にしてるため帯によく密着します。さらに

内外底全裏面に釉薬を施すことで紐や帯を傷つけたり、磨滅しないような構造と成っていますが、このような細工は帯留制作時、挾持部を陶磁器の生継等の伝統技術を生かすことで初めて成し遂げられたわけです。

このように、二宮都水の作った帯留は好評でしたが、それにとどまらず、二宮都水の考案が、素材を彫り込んで作る朝山の帯留や考案とはまったく異なる技術から生まれたものだと明らかにし、その考案を都水が公開したため有田焼帯留が流行し、当時の有田の不況の危機を救いました。（※デザイン及び実用新案の資料はホームページで公開！）

編集後記

有田史談会の発足から1年が過ぎた。会長として有田史談会の発足から先頭に立ち、我々会員の牽引役を果たして来られた西山峰次氏が逝去された。1昨年の暮れ2人で韓国釜山へ3泊4日の旅行に出掛けたことが、最後の良い思い出となった。

発足直後に創刊号を発行したものの、次号発行への意欲を失い2年近い月日が過ぎてしまったが、どうか再起出来たことに安堵せず、次号への足掛かりとしたい。

